

学会ハイライト

第32回日本皮膚悪性腫瘍学会学術大会を終えて

(平成28年5月27, 28日・かごしま県民交流センターにて)

金蔵 拓郎

鹿児島大学大学院医歯学総合研究科皮膚科学
第32回日本皮膚悪性腫瘍学会学術大会会長

はじめに

平成28年5月27, 28日の両日、第32回日本皮膚悪性腫瘍学会学術大会を「かごしま県民交流センター」で開催した(図1)。本学術大会を鹿児島にお迎えするのは平成11年に神崎保教授(現名誉教授)が主催された第15回大会以来17年ぶりのことである。この間に皮膚悪性腫瘍の診断と治療は目覚ましい発展を遂げた。診断に関してはPET/CT等の先進的な技術が普段に利用できるようになり、治療としては粒子線治療が鹿児島を含め全国各地で稼働を始めておりその普及は目覚ましいものがある。病態の解明も長足の進歩を遂げつつあり、トランスレーショナルリサーチの成果は分子標的薬や免疫チェックポイント阻害薬として陸続と臨床の場に導入されている。本学術大会では、これらの最先端の情報を集約し会員に提供すべくプログラムを検討・編成した。

特別講演1

特別講演には University Hospital ZürichのReinhard Dummer教授をお招きした。Dummer教授は世界の皮膚悪性腫瘍研究を牽引している研究者の一人で、インパクトファクター約5,000という論文業績をお持ちである。Dummer先生には“Cutaneous malignancies are paradigms for new cancer therapies including targeted and immunotherapy”のタイトルで悪性腫瘍治療の最先端を紹介

介していただいた。現在もっとも注目されている免疫チェックポイント阻害薬の1つである抗PD-1抗体など本邦でも使用されている薬剤に加えて、ソニックヘッジホッグ経路の阻害薬であるSonidegib, Vismodegibなどわが国ではいまだ使用されていない基底細胞癌に対する薬物療法についても触れていただいた。先生のご講演を拝聴し、皮膚悪性腫瘍の治療が新たな段階を迎えたことを実感した。

シンポジウム

「皮膚悪性腫瘍とリンパ節」, 「ATL」, 「皮膚悪性腫瘍の画像診断」, 「医療」, 「皮膚悪性腫瘍の新たな薬物療法」の5つのシンポジウムを企画した。

「皮膚悪性腫瘍とリンパ節」

大阪医療センターの爲政大幾先生に「SLN navigation surgery その実際と今後の課題」、熊本大学の福島聡先生に「SLN生検をreviewする」のタイトルでセンチネルリンパ節生検とリンパ節郭清の現状を概観していただき、疾患ごとに現在までのアウトカムを3名の先生にレビューしていただいた。鹿児島医療センターの松下茂人先生に悪性黒色腫、富山県立中央病院の八田尚人先生に乳房外Paget病、新潟県立がんセンター新潟病院の竹之内辰也先生に有棘細胞癌に関してご講演いただいた。

「ATL」

ATLは十数年前は南九州を中心とする endemic area に限られた疾患であったが、集団就職が盛ん

なころの人口の移動の影響で、今や首都圏や関西圏でも患者数が増加している。そのような背景を踏まえて「ATL」のシンポジウムを企画した。最初に東京大学新領域病態医療科学分野の内丸薫先生に「HTLV-1 carrierと患者の実態」のご演題でATLの現状を概説していただいたうえで、東京医科歯科大学免疫治療学分野の神奈木真理先生に「HTLV-1感染疾患の機序」、久留米大学病理学の瀬戸加大先生に「ATL治療層別化のためのマーカー開発とその考え方」、鹿児島大学血液・免疫疾患研究分野の石塚賢治先生に「ATLに対する新規治療の開発」、今村病院分院の宇都宮興先生に「ATLにおける造血幹細胞移植療法」のご演題で最新の研究成果を披露していただいた。ATLに関してわが国を代表する第一人者の先生方にご講演いただき、参加者は基礎、臨床の両面から多角的にATLを理解していただけたと思う。

「皮膚悪性腫瘍の画像診断」

皮膚悪性腫瘍の診断と治療方針の決定に画像診断は欠かせないものになっており、技術の発展も目覚ましい。本シンポジウムでは聖マリアンナ医科大学の門野岳史先生に「ダーモスコピー」、東京女子医科大学東医療センターの小林憲先生に「超音波検査」、岡山医療センターの浅越健治先生に「PET/CT」、静岡がんセンターの大塚正樹先生に「MRI」について概説していただいた。すべてのご講演が臨床に即したお話で日常診療に大いに役立つ内容であった。

「医療」

緩和医療に関するシンポジウムは本学術大会で数年来毎回開催されている。このシンポジウムは兵庫県特定医療担当参与の熊野公子先生が中心になって企画して下さった。まず熊野先生が「全国アンケート調査結果」をご報告され、静岡がんセンターの清原祥夫先生が「静岡がんセンターにおける緩和医療～多職種チーム医療を通じて～」のご演題で、鹿児島医療センターの松下茂人先生が「地元で看取る～人生の最期を何処で過ごすか～」のご演題で臨床最前線の状況を紹介された。続いて「病院で死ぬということ」(文春文庫)などの



図1 プログラム・抄録集表紙。

著者としてご高名な山崎章郎先生に基調講演をいただいた。ご演題は「苦しむ人々に向き合う—スピリチュアルペインとそのケア」で、理論に基づいた適切な傾聴の大切さなどスピリチュアルペインのケアについて理論的に解説して下さった。

「皮膚悪性腫瘍の新たな薬物療法」

代表的な皮膚悪性腫瘍に対する新規薬物療法について5名の先生方にup-to-dateな情報を提供していただいた。悪性黒色腫について国立がん研究センター中央病院の堤田新先生、悪性リンパ腫について東京大学の菅谷誠先生、血管肉腫について日本医科大学の帆足俊彦先生、有棘細胞癌について熊本大学の青井淳先生、基底細胞癌について京都大学の大塚篤司先生にお話いただいた。Dummer教授の特別講演と併せて聴くことで理解が深まったのではないかと思います。

特別講演2

悪性腫瘍研究が進み治療法が進歩することで患者さんの生命予後は改善してきた。それに伴って、いかに患者さんのquality of lifeを保つかということに注意が払われるようになってきた。緩和ケアもこの流れで捉えることができる。本学術大会では特別講演2として「患者の心を考える」と題する講演会を企画した。演者にはお二人をお招きした。

お一人目は愛華みれさん。愛華さんは鹿児島県の旧根占町（現南大隅町）のご出身で宝塚歌劇団花組のトップスターとして人気を博された。宝塚を退団した後も女優をされていたが、平成20年に悪性リンパ腫を発病する。しかし厳しい治療に耐えてリンパ腫を克服され、今また舞台にスクリーンに活躍されている。お二人目は長倉伯博先生。長倉先生は、鹿児島市の西郊にある浄土真宗本願寺派瑞雲山善福寺のご住職でいらっしゃる。住職の立場で多くの病院の緩和ケアチームの一員として癌患者さんと向き合っておられる。学術大会のプログラム・抄録集からお二人のご演題と抄録を引用する。

演題：「『伝わる喜び』・・・言葉の力」

「愛華自身が、悪性リンパ腫の治療中に実際に体感した患者としてのさまざまな想いと、そこに寄り添う家族や医療関係者の方々との実体験に基づくドキュメント」

演題：「『病と向き合う人々と共に』～臨床僧侶の話～」

「『私の病院はキリスト教系だが、患者の多くは仏教徒だ。それなのに日本の坊さんはなぜ死んでからばかりで、患者さんや家族が辛いときに現れないのだ』という指摘を牧師であり外科医である方から受けたのが25年前。さらに日常の僧侶としての仕事のなかで死に至るまでの病院での過ごし方が残された家族に大きな影響を与えていることを感じていたことと相まって『病院にいる僧侶』としての役割を果たすようになりました。初めは警戒心を持っておられたようですが、心温かい鹿児島

の医療者たちは、チームのなかでスピリチュアルペインの領域での役割を与えてくださいました。本日は、宗教者としての立場からのコミュニケーションと死生観の訴えにどう向き合ってきたかを、ささやかな経験を通して提言してみたいと思います」

学術大会の準備を進めるなかでこのお二人のご演題と抄録を目にして期待は高まった。果たして大会当日、お二人のお話は私の期待を大きく上回るものであった。

愛華さんの患者の立場からの話は医療に携わる者にとって実に有意義であった。医師が当然心掛けるべきことなのに、診療業務のなかで患者さんの気持ちを考える姿勢がなおざりになっていないか、改めて反省させられた。患者さんにとって「言葉の力」は本当にあることも教えて貰った。辛い治療が続き気持ちも塞ぎがちな愛華さんは舞台の稽古をする気力も湧かない。そんなときに主治医に尋ねた。

「先生、私は次の舞台に立てるのでしょうか」

主治医はこう答えたそうだ。

「僕はもうそのチケットをゲットしたよ」

その言葉を聴いた途端、科白の練習を始めていたそうである。

長倉先生は病と向き合う患者さんに寄り添う宗教者として感じ取られたことを、飾らない言葉で伝えてくださる。

癌に苦しむ高齢の女性の部屋を訪問したら、いきなりティッシュペーパーの箱が飛んできた。2回目も同じ。3回目は顔に唾を吐きかけられた。そんなことが繰り返され、先生は患者さんに問いかける。

「おばあちゃん、そんなに僕がいやですか。もう来ないほうがいいですか」

「来るなどはいってない」

それがおばあちゃんの答えだったそうである。看護師に聴くと、長倉先生が訪問した日にはおばあちゃんはいつもよりも良く眠っていたそうである。

末期癌に侵された壮年の男性の、

「どこまでも 行けるはずの 切符だった 病



図2 会員懇親会.

に色褪せし 夫婦の切符」
という歌も紹介された。

ステージ上の座長席から会場を見渡すと大半の先生が目頭をぬぐっておられた。

愛華さんには講演会の後、会員懇親会でも歌を披露していただいた。曲はご自身が作詞された「地球～TERRA～」で、宝塚で鍛えた歌唱力は素晴らしく、華やかで力強い歌声で会場を盛り上げていただいた(図2)。

おわりに

皮膚悪性腫瘍に関する研究はこれまでも着実に発展してきた。とくにこの数年の薬物療法の進歩

には目を瞠るものがあり、この傾向は当分は続きそうである。革新の時代に年次学術大会が果たす役割は大きい。これからも「日本皮膚悪性腫瘍学会は患者さんご家族とともに皮膚がんに向かうチームであり続けます」との本学会の理念に沿って、日本皮膚悪性腫瘍学会と学術大会がさらに充実し発展することを願っている。

第32回学術大会には一般演題204題、CPC演題8題と全国の先生方から多数のご演題を出題していただいた。また2日間で約600名のご参加をいただき無事に閉会式を迎えることができた。学術大会に参加して下さった先生方、学会運営に携わって下さったすべての方々に感謝しつつ筆をおく。